



下野新聞閲覧台の右側に“角川まんが学習シリーズ日本の歴史”コーナーを設置しました



歴史学習の現場では近現代史が重要性を増しており、高校の学習指導要領では、日本と世界の近現代史を学ぶ「歴史総合」が必修科目になっています。本シリーズは歴史学の最先端の研究成果も取り込んでいるので歴史を様々な角度から学ぶことができます。(KADOKAWA まんが学習シリーズ HP より) また、漫画でストーリー化されているので、疲れずに読むこともできます。教職課程を履修している学生の皆さんはもちろん、そうでない方も夏休みを利用して、読んでみてはいかがでしょうか？

\*\*\*\*\*

内村鑑三『後世への最大遺物 デンマーク国の話』

教授 内藤英二

今から半世紀以上前になる私の体験談の紹介です。

「あなたは最近、どんな本を読みましたか？」大学のゼミに入室して少し経った頃、指導教授の先生に尋ねられて「表題にある本を読みました」と答えた。

大学生としては安易な内容の答えではあるが、当時スウェーデンを中心とする北欧の社会福祉・社会保障政策研究の日本での草分け的な存在であった研究者のゼミに入るにあたり、予備知識として身近にある北欧関連の書物を読んだ結果としての発言だった。

岩波文庫に収められていた前段の『後世への最大遺物』は、社会や国家の安定をもたらすための事業経営という今日の経営学にも通ずる重要な概念が説かれており、後段の『デンマーク国の話』には平和を希求する国家経営のあり方が示され、そのために前段の社会・国家の安定のための事業という概念と見事に主張がリンクしている。(若いころの未熟な読後感のままで申し訳ないが)

今日でも首都コペンハーゲンを出て、ほんの少しドライブでもすれば酪農が営まれている、のどかな田園風景を目にすることのできるデンマークという国が、かつては国土一面が荒地で、長年の開墾によって現在の姿になったという事実に衝撃を覚えました、などという見解を先生に述べたような記憶がある。

「これは私が人生で初めて触れた、社会科学に関連した書籍なのですよ」

私の読後感は別として、先生は感慨深そうに、私と同年配かそれよりも若い時分の、ご自身とこの本の出会い、関わりについて話して下さいました。

先生のお父様は、当時の帝国海軍軍人で最終的な階級は海軍大将、第二次世界大戦開戦直前までは連合艦隊司令長官の職にあった方で、先生が大学に進学するにあたり、将来の進路について話し合う機会があったのだそうだ。その際、平家物語に心酔していた先生は「文学を専攻したい」と言ったところ、「国家の為に身を捧げる軍人の子弟が文士(当時の文学者をこう呼んだらしい)になりたいとは何事であるか」ということになり、暫くの間自室での謹慎を命じられたという。

丁度、海軍士官となっていた先生のお兄様が休暇を取って帰宅しており、自室で打ちひしがれる弟を見かねて、「経世済民の策である経済学を勉強させれば、国家の為に働くことができるのではありませんか」と助け舟を出して下さいました。

もともと、条約改正担当として長くロンドンに赴任されていたことのあるお父様は、お兄様の意見に納得され、書齋からこの本を取り出して、「社会科学を志すならこの本を読んでみなさい」と言われ、先生は経済学をはじめとする社会科学を専攻することになったのだという。

海軍の中でも海外通で知られたお父様は、諸外国との交戦、それを見越してのアジア南方への軍事活動に反対を唱え、当時の政府によって職を解かれて戦地派遣となり、そのまま病死されたそうだ。艦隊勤務のお兄様も戦局の悪化に伴い戦艦で出撃され、そのまま亡くなられたのだという。

「戦争が終わった時、一族で生き残っていた男子は私だけになってしまったのです」  
先生が寂しそうに言われた言葉を今でも鮮明に記憶している。

今日、北欧諸国は多くの先進的企業を擁し、合理的でユニークな社会システムを構築して、産業、福祉、環境等の多くの局面で、世界の模範となっている。その背景には平和を希求するという基本的な考え方が貫かれており、先生が長い間、北欧の経済や社会を研究された原動力のひとつとしてもこうした平和への願いがあったように、いまさらながら感じる。

先生は晩年、その長年の北欧研究への貢献を称せられ、スウェーデン王室より『北極星勲章』(Commander of the Royal Order of the Polar Star)を授与された。

私の先生のお名前は日本大学名誉教授 高須 裕三 先生という。

発行元:宇都宮共和大学シティライフ学部 研究・図書委員会